広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	東郷語における語頭両唇閉鎖音の発展年代について
Author(s)	佐藤，暢治
Citation	ニダバ , 24 : 115 - 122
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047962
Right	
Relation	

論　文

東郷語における語頭両唇閉鎖音の発展年代について

佐　藤　暢　治

0．はじめに

東郷(ドゥンシャン)語とは、中国の甘粛省臨夏回族自治州東郷族自治県を中心に居住する東郷族373,872人(1990年)が話しているモンゴル系言語のひとつである[1]。

東郷語には、通言語的にも興味ある言語変化が少なからず観察されるが、過去の言語状況を記した文字文献がないため、文献からどの言語変化が具体的にいつ起きたのかを知ることはできない。従って、音韻変化の場合も、それぞれの変化が起きた順序の特定は比較的容易であるが、それぞれの変化の絶対年代を特定することは難しく今のところまったくできていないというのが実情である。

こうした場合、有益なのは、言語接触からの考察を取り入れることである。周知のように、語は借用されると、借用した側の言語、つまりは与え手側の言語(source language)ではなく受け手側の言語(target language)の音韻変化を蒙るようになる。東郷語には、漢語やチュルク系言語など異言語との接触を物語る語彙が数多い。そのため、漢語やチュルク系言語などに来源をもつ語の中から、起きた時代が明確なそれら言語特有の音韻変化を反映する語が見出され、しかもその語が東郷語に生じた音韻変化を受ける候補にもなりうるなら、東郷語に起きた音韻変化の時代決定に重要な手がかりを与えることになるはずである。

この小論の目的は、以上のような観点から、東郷語の語頭両唇閉鎖音に生じた２つの音韻変化に焦点をあて、それらが起きた具体的な年代の手がかりを、漢語来源の借用語から得ることにある。

第１節では、東郷語の語頭両唇閉鎖音にどのような２つの音韻変化が起きたのかを示し、それらが起きた相対年代、更には語頭両唇閉鎖音における音韻体系の変遷について述べる。第２節では、漢語来源の借用語 hamusa「大ざら」[2]の語頭子音が東郷語に生じた語頭両唇閉鎖音の発展の絶対年代特定にどのような手がかりを与えるのか述べる。

1．語頭両唇閉鎖音における２つの発展の相対年代と音韻体系の変遷

モンゴル祖語の語頭両唇閉鎖音 *b（軟音 lenes）と *p（硬音 fortes)に対して、東郷語は次のような対応を示す。

モンゴル祖語	東郷語
*b	b, p
*p	f, ɕ, ʂ, x, h [3]

すなわち、東郷語では、語頭両唇閉鎖音 *b は b と p に分裂し、語頭両唇閉鎖音 *p は様々な摩擦音に分化発展したことになる。

まず、語頭両唇閉鎖音 *b が、東郷語で b と p に分裂した条件について示そう。後者の対応は、次のように、語頭両唇閉鎖音 *b が東郷語において第２音節の頭にある *t,*č などの硬音に同化したためである(以下、この同化を「語頭 *b の硬音化」と呼ぼう)。

モンゴル文語	東郷語	
batu	pudu	堅固な
butara-	putura-	散る
bütü-	pudu-	終わる
baγta-	puda-	収容する
bičі-	pidʑi-	書く
bučal-	pudʑalu-	沸かす
burčaγ	pudʑa	豆
bürkü-	pugu-	覆う

佐藤(1991)では、この「語頭 *b の硬音化」は、その後ろに短母音＋(*r,*g)＋*t,*č,*k が続くときに生じたとしている。従って、語頭両唇閉鎖音 *b が、東郷語において b として継承され、上のような「語頭 *b の硬音化」は観察されないのは、第２音節の頭に流音、*d,*j などがある場合となる。

モンゴル文語	東郷語	
bari-	bari-	持つ
boro	boro	灰色の
belen	belien	無報酬の
bulaγ	bula	泉

bide	bidʐien	我たち(排除形)
bidügün	biedu̧	粗い
bolʃimor	bundʐu	小鳥
bergen	banɣan	兄嫁

次に、語頭両唇閉鎖音 *p が、東郷語において様々な摩擦音に分化発展した状況をみることにしよう。語頭両唇閉鎖音 *p は、東郷語の場合、それに後続する母音の種類に応じて、通例、母音 *a,*e の前では h 、母音 *o,*ö の前では x 、母音 *u,*ü の前では f、母音 *i の前では ɕ あるいは ʂ に変化している。語頭両唇閉鎖音 *p を摩擦音 x として継承するダグル語の例と共に掲げた、次をみられたい[4]。

	モンゴル文語	東郷語		ダグル語	
*a,*e の前	arban	haro̧	十	xarab	十
	eče-	hetʂe-	疲れる	xetʃ-	家畜がやせる
*o,*ö の前	odun	xodu̧	星	xod	星
	ötün	xodeu	蛆	xud	蛆
*u,*ü の前	urba-	furaɣa-	戻る	xurbi-	寝返りをうつ
	üker	fugie	牛	xukur	牛
*i の前	iniye-	ɕinie-	笑う	xineed-	笑う
	iče-	ʂidʐe-	恥じる	xitʃ-	はにかむ

発展過程として、語頭両唇閉鎖音 *p がまず摩擦音 ɸ に変化(以下、この変化を「語頭 *p の摩擦音化」と呼ぼう)し、その後母音 *u,*ü の前では唇音性を失うことなく f に変化し、母音 *i の前では口蓋化して ɕ (直後に反り舌子音をもつことになった場合にはそれに更に同化した反り舌子音 ʂ)に変化し、残りの４つの母音の前では h に変化し、*o,*ö の前で更に x に変化したという過程が想定できる。

では、語頭両唇閉鎖音に生じた２つの発展、「語頭 *b の硬音化」と「語頭 *p の摩擦音化」は、どちらがより早く起きたのであろうか。「語頭 *p の摩擦音化」が、「語頭*b の硬音化」に先駆けて起きたことは明らかである。もし、逆の順序で変化が起きたのなら、「語頭 *b の硬音化」を経た p も摩擦音化を経験したはずだからである。従って、東郷語における語頭両唇閉鎖音の２つの発展、「語頭 *b の硬音化」と「語頭 *p の摩擦音化」は、

１） 語頭 *p の摩擦音化
２） 語頭 *b の硬音化

という順序で起きたことになる。そして、両唇音に関する限り、東郷語の音韻体系には次に示したような変遷があったと考えてよさそうである[5]。なお、語例は、語頭子音以外何ら変化しなかったかのように示してある。

		モンゴル祖語						東郷語
閉鎖音	軟音	*b		b		b		b
	硬音	*p	→		→	p	→	p
摩擦音				ɸ		(ɸ/f,h ----)		
鼻音		*m		m		m		m

*bari-	→	bari-	→	bari-	→	bari- 「持つ」
*bači-	→	bači-	→	pači-	→	pidʑi-「書く」
*püre	→	ɸüre	→	ɸ/füre	→	fure 「長い」
*peče-	→	ɸeče-	→	ɸ/heče-	→	hetʂe-「疲れる」

しかし、今までの語例から、「語頭 *p の摩擦音化」と「語頭 *b の硬音化」が東郷語で起きた年代について具体的に知ることはできない。

2．漢語来源の借用語 hamusa「大ざら」の語頭子音がもつ意味

では、東郷語における語頭閉鎖音の２つの発展、「語頭 *p の摩擦音化」と「語頭 *b の硬音化」がいつ生じたのか、その手がかりを漢語来源の借用語から探っていこう。

陳(1988)に従うと、東郷語における基礎的な調査語彙3171語のうち、49.76%が漢語来源の借用語となる。そのため、東郷語には、語頭に p をもつ漢語からの借用語が多数認められるが、それらは次のように漢語の音形式そのままであり、最近借用された語とみてよい。漢語の閉鎖音は、現在、無声有気音と無声無気音の２項対立であり、東郷語は前者を p で借用し、後者を b で借用している[6]。

漢語		東郷語	
炮	páo	pau	砲
賠	péi	peiji-	償う
琵琶	pípa	pipa	琵琶
破	pò	po	破れる

葡萄	pútao	putau	ぶどう
cf. 包穀	bāogǔ	baugu	とうもろこし

そうしたなか注目されるのが、東郷語 hamusa「大ざら」である。この語は、従来、語源不明とされていた語である。しかし、私見に従うと、東郷語 hamusa「大ざら」は、形式と意味２つの面から漢語 盤子 pánzi「大ざら」に由来する語となる。漢語の形式と東郷語の形式に大きな差があるため、この見方に異論を唱える人がいるかもしれないが、２言語間に見出せる大きな差は、東郷語 hamusa「大ざら」が漢語来源の借用語の中でもかなり古い層に属することを端的に物語っている。

東郷語が語頭に p ではなく h をもつのは、東郷語が漢語からこの語を「語頭 *p の摩擦音化」が起きる以前か、既に「語頭 *p の摩擦音化」が起きた以降かはわからないが、「語頭 *b の硬音化」以前に、pamsa（ないしは ɸamsa ）という形式で借用し、その語頭子音が先に述べたモンゴル系の語 haroŋ「十」などと同様 h へと発展したからである。このことを、後述する変化と合わせ図示すると、次のようになる。

漢　語　　盤　子
　　pán　zi
　　↓　　---------- 借用
東郷語　　pam　sa(ɸamsa)
　　↓　　---------- 語頭子音の h への変化、開音節化
　　ham u sa

そして、漢語 ー子 zi に東郷語 －sa が対応するのも、東郷語が漢語からこの語をかなり古い時代に借用したからにほかならない。漢語で ー子 という語構成をもつ語を、東郷語がどのような形式で借用しているのかみてみると、東郷語化し借用した －sa と漢語形式そのままに借用した －dzi の２通りの対応が認められる。これは、次の通り、前者の形式を含む語がより古い時代に漢語から東郷語に借用された語であり、後者の形式を含む語が最近漢語から東郷語に借用された語であることを示している。

より古い時代の借用語	最近の借用語
lausa「ラバ」(＜騾子 luózi)	beidzi「茶碗」(＜杯子 bēizi) jandzi「畑」　(＜園子 yuánzi) sundzi「孫」　(＜孫子 sūnzi)

漢語 一子 に関して、東郷語 hamusa「大ざら」の借用方法は、lausa「ラバ」に並行する。東郷語が、hamusa「大ざら」を lausa「ラバ」と同様、より古い時代に漢語から借用したことを示す1証拠となる。

また、語中での音連続 -nz- を東郷語が -ms- として n を m で借用したのは、-ns- という音連続がモンゴル系の言語で元来許容されないからである。-ms- の間に添加された母音 u は、漢語との接触により生じた東郷語の開音節化を反映する。語中で子音 *-ms- が連続する場合に生じた東郷語の開音節化過程は、モンゴル文語 amsa-、sarimsaγ にそれぞれ東郷語 amusa-「味わう」、samusa「たまねぎ」が対応するように、常に、2つの子音の間に母音 u を添加するというものである。

このようにみていくと、東郷語 hamusa「大ざら」が漢語 盤子 に来源をもつという見方に異論はないであろう。

さて、これだけなら、東郷語 hamusa「大ざら」は自らの語頭両唇閉鎖音の発展年代決定に何ら手がかりを与えない。ところが、盤 pan という漢語が、漢語音韻史でいう「全濁音無声音化」を経験した語であると知れば、事情は変わってくる。先に述べたように、漢語から借用したとき、東郷語 hamusa「大ざら」の語頭子音 h は、p (ないしは φ)であった。つまり、東郷語が漢語から 盤子「大ざら」を借用したのは、順序として、まず漢語で「全濁音無声音化」が起きた、その後ということになるのである。もし、そうではなく、「全濁音無声音化」が漢語で起きる前に、東郷語が漢語から 盤子「大ざら」を借用したのなら、現在東郷語はこの語の語頭に閉鎖音 b を持っているはずである。

「全濁音無声音化」というのは摩擦音で始まり、破擦音へと拡がり、閉鎖音が最も遅れたという。羅(1933)には、標準的な北方音の「全濁音無声音化」が終わった時期として、10世紀という時代が示されている。東郷語が hamusa「大ざら」という語をいつ漢語から借用したかについては地域性の問題もあり、正確なことは何も言えないが、11世紀以降ということになるのであろうか。

いずれにせよ、疑う余地がないのは、東郷語が接触した漢語で「全濁音無声音化」が起きた頃、東郷語に「語頭 *b の硬音化」はまだ起きず、語頭 *p も閉鎖音のままであったか、あるいは摩擦音化した φ であったということであろう。

3．おわりに

以上、東郷語における語頭両唇閉鎖音の2つの発展、「語頭 *p の摩擦音化」と「語頭 *b の硬音化」の年代特定について、その手がかりを漢語来源の借用語 hamusa「大ざら」を通じて得ようとしてきた。いつ起きたと明確に年代を特定することはできなかったが、従来不明とされてきた年代が、ある程度絞り込めたのではないだろうか。

東郷語には来源がわからない語彙がまだたくさんある。こうした語彙の来源が明らかになれば、東郷語の歴史に新たな光を投げかけるに違いない。

註

1）東郷族の人口は、胡(1991：233)に示された1990年第４次全国人口普査統計による。373,872人のうち、甘粛省に居住するのは311,457人である。そして、臨夏回族自治州には307,876人、東郷族自治県には172,246人が暮らしている。

2）東郷語の例は、布和等編(1983)による。ただし、表記は一部改めた。

3）東郷語には、次のように、語頭両唇閉鎖音 *p が既に消失した語もある。語頭両唇閉鎖音 *p を、摩擦音 x として継承するダグル語(恩和巴圖(1983)による。ただし、表記は一部改めた。)の例と共に示そう。

モンゴル文語	東郷語		ダグル語	
asaγ(u)-	asa-	問う	xasoo-	問う
üsün	usuŋ	毛	xus	毛髪

これらの語には、説明が必要である。第２音節の頭に摩擦音 s があるための異化作用か、あるいは東郷語の強勢が語末音節に立つことと関係しているのであろう。

4）ダグル語の出典と表記は、註３)の通り。

5）現在の東郷語において、摩擦音 f,h,x は個々に独立した音素である。しかし、摩擦音 φ が後続する母音に応じて f,h,x に発展した当時は、同一音素の異音であったであろう。また、「語頭 *b の硬音化」と摩擦音 φ が後続する母音に従い f,h などに発展するのとどちらが早いかはわからない。そのため、音韻体系のなかに(φ/f,h ----)と記してある。

6）東郷語は、漢語来源の借用動詞を漢語の形式そのままに用いることはない。借用の際、東郷語は漢語の動詞を、たとえば peiji-「償う」から抽出できる -ji- のような語幹形成接尾辞を添加し、東郷語化して用いる。この詳細は、佐藤(1992)をみられたい。

参考文献

布和 等編 1983 『東郷語詞彙』 内蒙古人民出版社

陳乃雄 1988 「蒙古語族語言的詞彙」『内蒙古大学学報』1 105-116

《東郷族自治県概況》編写組 1986 『東郷族自治県概況』 甘粛民族出版社

恩和巴圖 1983 『達漢小詞典』 内蒙古人民出版社
胡国興 主編 1991 『甘粛民族源流』 甘粛民族出版社
劉照雄 1981 『東郷語簡志』 民族出版社
羅常培 1933 『唐五代西北方音』 中央研究院歴史語言研究所
喩世長 1983 『論蒙古語族的形成和発展』 民族出版社

角道正佳 1982 「ドゥンシャン方言の音韻変化」『大阪外国語大学学報』59 17-35
栗林均 編 1986 『「東郷語詞彙」蒙古文語索引』 東京外国語大学
——— 1989a 「東郷語」『言語学大辞典』1281-1288 三省堂
——— 1989b 「モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触 —— 中国甘粛・青海省の「孤立的」モンゴル系諸言語を中心に —」『民族接触 北の視点から』 273-289 六興出版
佐藤暢治 1991 「中国甘粛、青海省のモンゴル系諸言語における語頭閉鎖音の軟音化と硬音化について」『日本モンゴル学会紀要』22 14-28
——— 1992 「東郷語における漢語動詞の借用方法について」『外国語・外国文学研研』15 23-29

Hattori, S. 1972 Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Development – With Two Additional Remarks, 『言語の科学』3 66-92
Lehiste, I. 1988 *Lectures on Language Contact*, Cambridge : The MIT Press.
Poppe, N. 1954 *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden.
——— 1955 *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki.
——— 1965 *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden.
Ramsey, R. A. 1989 *The Languages of China*, Princeton.
Thomason, S. G. & T. Kaufman. 1991 *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*, California : University of California Press.

Тодаева, Б. Х. 1961 《Дунсянский язык.》 Москва.